

# 『フランケンシュタイン』における帝国主義的主体の不安<sup>1</sup>

細川美苗\*

## *Frankenstein* and the Anxiety of the Imperial Subject

HOSOKAWA Minae\*

### Abstract

The purpose of this essay is to examine the influence of British Imperialism on Mary Shelley's *Frankenstein* written in the early nineteenth century. Since the 1970s, Shelley's literary works have attracted serious critical attention, though beforehand the research mainly focused on her relationships between the two main males in her life; her father, William Godwin, and her husband, Percy Shelley. Feminism represents the critical perspective most applied to *Frankenstein*. Since the 1990s, other viewpoints such as cultural studies have been enhancing the research on Mary Shelley. Unfortunately studies of Shelley, as well as that of the Romantic period in general, have not discussed in depth the influence of expanding colonialism on literature.

In order to look at the influence of colonialism in the book *Frankenstein*, the setting of the novel and the life of three main characters are discussed. These characters include the protagonist Frankenstein, his friend Clerval, and the English explorer Walton. They signify the Western explorers who attempted to make the unknown parts of nature knowable. From this perspective, this paper focuses on Frankenstein's creature who came into existence as a result of Frankenstein's pursuit of "nature to her hiding-places." This would suggest that the creature is a substantiation of fears felt by the British about looming non-white peoples during the Imperial regime. The fear did not come from any innate character within non-white peoples but rather arising from the images that Western culture constructed about them.

I

これまでのMary Shelley研究は彼女の夫や父との関係に関する伝記的なものが多く、1970年以降になってようやく伝記よりむしろ彼女の作品に焦点が当てられるようになった。1970年以降は、それまで男性詩人中心であったロマン派研究において、散文や女性作家による作品の見直しがなされた時代で、シェリーの作品の中では特に*Frankenstein or The Modern Prometheus* (1818, 1831)<sup>2</sup>の研究が大きく進んだ。しかし、女性作家の再評価を目指すフェミニズムの視点は、階級や人種などの小説に含まれるほかの問題と比較して、性差に関する点を大きく焦点化して論じる傾向にあった。1990年以降にはカルチュラルスタディーズなどの、フェミニズム以外の視点から

---

\* 名古屋大学大学院国際開発研究科研究生

## 『フランケンシュタイン』における帝国主義的主体の不安

も分析されている。さらに近年のシェリー研究は『フランケンシュタイン』以外の作品にも拡大している。

しかしシェリーに限らず、ロマン主義時代の文学と当時の帝国主義政策との関わりを論じるものは少ない。ロマン主義文学と前後する18世紀およびヴィクトリア朝研究では、Edward Saidの*Orientalism* (1978) を契機に帝国主義や植民地主義政策と文学の関わりの研究が大きく進んだことと比較して、ロマン主義時代におけるその分野の研究は遅れているとAlan RichardsonとSonia Hofkoshは指摘している (Richardson 2)。しかし、アメリカ独立後のロマン主義時代の英国には「帝国の危機感」が漂い、帝国におけるインドの重要性や英国民の愛国心が大いに高揚した時代であり、当時の英国海外政策と文学の関係はロマン主義時代の研究において重要な視点と考えられる (Richardson 3)。歴史家Linda Colleyがこの時期を英国的アイデンティティーが完成した重要な時期として指摘するのも偶然ではない。

作品の背景として、作者の父親William Godwinを訪問したSamuel Taylor Coleridgeが*The Rime of the Ancient Mariner* (*Lyrical Ballads*収録、1798) を読み上げた際に、それを少女時代のシェリーがソファの陰から聞いたというエピソードが頻繁に紹介されている。同様に、東インド会社のサーバントであったCharles Lambもしばしばゴドウィン家を訪れ、その際インドに関する会話をシェリーが耳にしたであろう点も、『フランケンシュタイン』の創作に関わる重要な背景である。また小説執筆時に作者は、植民地拡大を支える開拓報告書の一つであるスコットランド人冒険家Mungo Parkによる西アフリカの記録を読んでいた。このように、拡大する帝国とそれを肯定してゆく思想的土壌は、『フランケンシュタイン』執筆に関わる要素であり、それらが作品にどのように現れているのか、またそのような歴史的コンテクストは、これまで多様に解釈されて来たFrankenstein's creature<sup>3</sup>、またフランケンシュタインと怪物の関係に関してどのような知見を与えうるのかを考察する。

## II

『フランケンシュタイン』の設定は、北極付近にいる船が救助したフランケンシュタインが語る話を、イギリス人船長Waltonが書き留め、それを本国の姉へ書簡で送るというものである。これは未開の土地を探検中の西欧人が、知りえた情報を本国イギリスへと送るという点で、植民地拡大の基礎となるアドベンチャー・ナラティブと同様の形式である。また、ウォルトンの航海の行き先は、アジアであることも本作品と帝国主義政策との接点である。彼は北周りで、アジアに抜ける航路を模索中なのである。

This expedition has been the favourite dream of my early years. I have read with ardour the accounts of the various voyages which have been made in the prospect of arriving at North Pacific Ocean through the seas which around the pole. (*Frankenstein* 29)

ウォルトン船長と同様に北極経由でアジアへたどり着く航路をロシア海域で模索したスコット

ランド人水夫は実在しており、その水夫の名は実際にウォルトンであった (Lew 260-261)。ロシアでの彼の体験は1761年に英訳されている。また、フランケンシュタインの友人Clervalはイギリスからインドへ出航し、西欧の植民地拡大を成し遂げ、貿易で一旗挙げることを夢見ている。彼はインドへ向かう旅の出発地はイギリスでなくてはならないと感じている。

He [Clerval] was also pursuing an object he had long had in view. His design was to visit India, in the belief that he had in his knowledge of its various language, and in the view he had taken of its society, the means of materially assisting the progress of European colonization and trade. In Britain only could he further the execution of his plan. (*Frankenstein* 139)

クラヴァールは自分の持つインドに関する知識によって、ヨーロッパによるインドの植民地化と貿易の発展を大いに助けることができるという信念のもとに、インドを訪問しようとしているのだ。このように『フランケンシュタイン』は、イギリス植民地政策拡大という歴史的コンテキストの只中にあり、それは作品を解釈する上で重要な視点である。

登場人物であるクラヴァールとウォルトンによるアジアにおける富の探求という野心は、結果的には主人公による生命神秘の探究により抑止される。それでは、一見帝国主義政策とは無関係であるフランケンシュタインの生命創造と、ほかの登場人物の持つアジアへの野望はどのように関わるのであろうか。

ウォルトンとクラヴァールは、明らかに西欧・イギリスによる帝国拡大を支持しているが、フランケンシュタインの生命創造は、帝国主義政策と関わりをもたないようである。しかし彼らは同様に未知の世界へと踏み込もうとする人物であり、3者は互いを映しあっている。フランケンシュタインはクラヴァールに自分を重ね合わせ、「しかし、クラヴァールの中に私は以前の自己を見た」(But in Clerval I saw the image of my former self) と言う (139)。またフランケンシュタインは、ウォルトンの極地航海を自分の創造行為と同一視し、彼の航海について以下のように警告する。

You [Walton] seek for knowledge and wisdom, as I once did; and I ardently hope that the gratification of your wishes may not be a serpent to sting you, as mine has been. I do not know that the relation of my disasters will be useful to you; yet, when I reflect that you are pursuing the same course, exposing yourself to the same dangers which have rendered me what I am, I imagine that you may deduce an apt moral from my tale. (*Frankenstein* 39)

フランケンシュタインが死に際に自らの生涯を語る相手であるウォルトンは、自分の航海を labourious voyage と表現する (28)。labourious という形容詞は、フランケンシュタインが繰り返

『フランケンシュタイン』における帝国主義的主体の不安

返し自分の創造行為に言及する際に使うlabour（「仕事」という意味だが、フランケンシュタインの創造行為の核心である「出産」という意味も持ちあわせる）と言う語を想起させる（my midnight labours 58; my labours 60）。また、彼らの仕事の完成は、生死の境の越境に関わるものであり、それらは未来にわたる人類全体の幸福につながると考えられているという共通項がある。フランケンシュタインは自分の仕事に関して、以下のように述べる。

Life and death appeared to me ideal bounds, which I should first break through, and pour a torrent of light into our dark world. (*Frankenstein* 58)

フランケンシュタインは生命創造の結果として、暗い死の世界から明るく光あふれる生命の世界への移行を想定している。同様にウォルトンは自分の航海の終着点においては、極地の暗闇と死の危険の象徴である「雪と霜は消え去り」(snow and frost are banished)、「永遠の光の国」(a country of eternal light)に到着すると考えている(28)。以下のウォルトンの発言は、彼の航海が危険や死の恐怖を克服したうえで達成されるものであり、未来にわたる人類全体の幸福につながる新発見であるという点で、フランケンシュタインが語る自らの創造行為の特徴と酷似している。

I shall satiate my ardent curiosity with the sight of a part of the world never before visited, and may tread a land never before imprinted by the foot of man. These are my enticements, and they are sufficient to conquer all fear of danger or death. . . . I shall confer on all mankind, to the last generation, by discovering a passage near the pole to those countries, to reach which at present so many months are requisite; or by ascertaining the secret of the magnet, which, if at all possible, can only be effected by an undertaking such as mine. (*Frankenstein* 28)

引用冒頭でウォルトンは自分の航海を人類未踏の自然へと踏み出すものだと表現している。これは未開の自然の探求という点で、フランケンシュタインが自分の創造行為に関して使用する表現、「自分は自然をその隠れた場所にまで追求した」(I pursued nature to her hiding-places)と同様のレトリックである(58)。

以上のようにフランケンシュタインはウォルトンを自分自身の分身と見なし、両者の野心は明らかに同じレトリックによって語られている。ウォルトンのほうでも、フランケンシュタインの辿った人生と自分の航海を重ね合わせるように、フランケンシュタインの人生を航海途中で難破した船に例えている。ウォルトンは「彼(フランケンシュタイン)の話は、奇妙でまた胸が張り裂けるようなものであるに違いない。航路にある堂々とした船を取り囲みそれを難破させるのは、恐ろしい嵐に違いない。このように!」(Strange and harrowing must be his story; frightful the storm which embraced the gallant vessel on its course, and wrecked it thus!)と、自

らの語りを締めくくり、フランケンシュタインの語りを導く(40)。フランケンシュタインの悲劇に自分の航路を重ね合わせたウォルトンは、自分の航海の行く末に不安を感じ、探検を取りやめる。

### III

フランケンシュタイン、ウォルトン、クラヴァールは、生死をかけた航海を経て新世界へたどり着こうと試みる人物であるが、フランケンシュタインのみが光と闇、若しくは生死の境界を突破することに成功した。生死の境を越境したフランケンシュタインは、彼の創造行為と類似した探求の途にあるウォルトンとクラヴァールの航路に関して警告を与える、若しくはそれを実際に阻む原因を作り出す人物である。ウォルトンとクラヴァールは帝国主義政策を推し進めるためにアジアへ希望を託した人物であることから、フランケンシュタインの破滅は、帝国拡大を図るウォルトンやクラヴァールのような西欧人がアジアにおける植民地拡大の末路に関して警告を読み取るべきアレゴリカルな悲劇と考えられる。以下では、帝国主義政策拡大の末に表れると危惧される怪物を、植民地政策を支える英国人アイデンティティの形成とそこに内包される不安感という観点から考察する。

フランケンシュタインの創造行為の基盤となる彼の野望は、自らの権力増大と他者支配を狙う植民地政策を表現しているとHelena Woodardは指摘している(Victor Frankenstein codifies the language of New World, colonialist conquest in his desire to create, dominate, and subjugate a new species that would idolize and obey him. 17)。つまりフランケンシュタインが未知の自然を探求し、彼をあがめ崇拜するであろうと考えて創造した怪物は、未開の土地を探検した末に西欧人が遭遇するノン・ホワイトのメタファーなのである。当然怪物は、当時英国人が有色人種に対して持っていたイメージを反映している。

H.L. Malchowはシェリーが怪物というメタファーを使って、当時英国に流布していた外国人嫌いを表現していると指摘している。

She [Shelley] dredged up a bogeyman that had been prepared by a cultural tradition of the threatening Other whether troll or giant, gypsy or Negro from the dark inner recesses of xenophobic fear and loathing. (18)

またマルチョウによれば、『フランケンシュタイン』に登場する怪物の気性は、当時の英国人が未開の人種に特有であると考えていたものである(This combination of vengefulness and affection was, in fact, a stereotype commonly applied to any savage or primitive race. 21)。怪物による伴侶制作の要求をフランケンシュタインが拒むのは、怪物が子孫を増やし勢力を拡大し、人類を駆逐するのではないかという恐怖心からである。マルチョウ(12)、ウッダード(26)はこの生殖力の強さに関する恐れは、当時英国人が黒人に対して抱く一般的な恐怖心であったと指摘している。

## 『フランケンシュタイン』における帝国主義的主体の不安

また、このテキストとアジアの関連の強さから、アジア地方、特にインド人と怪物との関連も検証しなければならない。18世紀の博物学者Georges-Louis Buffonはアジア人の肌色に関して黄色であると言及している（Man, white in Europe, black in Africa, yellow in Asia, and red in America, is only the same man tinted with the color of the climate. quoted in Gerbi 15）。ゆえに怪物の黄色い肌の色（His [monster's] yellow skin scarcely covered the work of muscle and arteries beneath.）は、彼とアジア人との関連を示す（60）。フランケンシュタインが恐怖感を抱く一つの理由である怪物の黄色い肌を、Joseph W. Lewはベンガル地方の人種の肌の色と関連付けている（273）。Elizabeth A. Bohlsも怪物とインド人の関連を指摘している批評家の一人である。彼女は特に怪物が炎によって自殺を遂げる点を、ヒンドゥー教の寡婦の行なうセルフイモレーション（「サティー」）と関連付けている（33）。D. S. Neffは怪物とサティーとの関連を指摘しつつも、当時その増加がイギリス人たちの恐怖の的となっていたハーフ・ケイスト、つまり父親がイギリス人で母親がインド人である男子と怪物の関連を強調している。

Confronted by a being that seems to be a nightmarish, but unmistakable, reflection of himself, Victor Frankenstein, like many of the British fathers of Anglo-Indian children, abandons the “wretch the miserable monster” who grins at him, mutters “some inarticulate sounds,” and stretches out a hand to him. (Neff 396)

18世紀、ハーフ・ケイストの子供は東インド会社の拡大に貢献し、イギリス本国で教育を受ける場合もあったが、18世紀終盤から19世紀にはその拡大が本国で社会不安の種となり、本国への入国は禁じられた。彼らは19世紀には、墮落と汚染の象徴として忌避されるものとなった。

有色人種に関して英国人が抱いていた恐怖心と怪物の共通点から、フランケンシュタインがなぜ自らの創造物を、その破滅を願うほど極度に恐れるのかという問題に、当時の英国海外政策との関連から焦点を当てたい。植民地政策のプロセスは、帝国側が主体的に未開を探検し、野蛮で文明を必要とする者たちを理解可能な客体として本国に報告し支配するという作業である。それは、見知らぬものを自分たちが理解可能な言語で報告し、西欧的な文明を与えるべき客体として思考の準拠枠に取り込む作業である。Ashton Nicholsは『フランケンシュタイン』執筆中にシェリーが読んでいたマンゴ・パークの西アフリカでの報告に関して以下のように述べている。

The exploratory (geographical) impulse of 1700s and 1800s rested on a similar, and equally revolutionary, assumption. The exploring culture (Europe) needed to *know* (the course of rivers, locations of mountains, customs of inhabitants) in order to *control* (open trade routes, establish settlements, extend influence) (original emphases, 97)

現実の冒険家パーク同様に、フランケンシュタインも未開の自然に踏み込んだ（I pursued nature to her hiding-places. 58）。しかしそこで彼が発見したものは、彼のイメージを大きく逸

脱していた。以下は怪物を最初に見た時のフランケンシュタイン自身の内面である。

How can I describe my emotions at this catastrophe, or how delineate the wretch whom with such infinite pains and care I had endeavoured to form? His limbs were in proportion, and I had selected his features as beautiful. Beautiful! Great God! His yellow skin scarcely covered the work of muscles and arteries beneath. I had worked hard for nearly two years, for the sole purpose of infusing life into an inanimate body. For this I had deprived myself of rest and health. I had desired it with an ardour that far exceeded moderation; but now that I had finished, the beauty of the dream vanished, and breathless horror and disgust filled my heart. (*Frankenstein* 60-61)

怪物はフランケンシュタインを敬い服従する美しい息子のイメージからはかけ離れた者、言語では表現し得ない存在である。言葉を失ったフランケンシュタインは完全な理性の休息状態とも、主体的行動の放棄であるともいえる眠りの状態へと赴く。

主体性を一旦放棄し就寝したフランケンシュタインは、目を覚ました瞬間に怪物が自分を見つめていることに気付く。怪物はフランケンシュタインを見つめ、フランケンシュタインは見つめられる客体の位置にある。この主体と客体という立場の転倒、つまり怪物はもはやフランケンシュタインの支配の客体ではないという点が、フランケンシュタインを最も恐れさせるのだといえる。

主体と客体の転倒という点は、怪物が生命を得る瞬間に顕著に表れている。フランケンシュタインの生命創造への希望は、怪物が目を開ける瞬間に恐怖へと代わっている。自分が主体的に生命を与えるという希望に胸を焦がしていたフランケンシュタインは、怪物が自主的に目を開く瞬間に彼を嫌悪する。怪物は目を開くという主体的な行動をなした時に、フランケンシュタインにとって黄色く醜いものへと変容する。

It was on a dreary night of November that I beheld the accomplishment of my toils. With an anxiety that almost amounted to agony, I collected the instruments of life around me, that I might infuse a spark of being into the lifeless thing that lay at my feet. It was already one in the morning; the rain pattered dismally against the panes, and my candle was nearly burnt out, when, by the glimmer of the half-extinguished light, I saw the dull yellow eye of the creature open; it breathed hard, and a convulsive motion agitated its limbs.

How can I describe my emotions at this catastrophe. (*Frankenstein* 60)

フランケンシュタインは怪物が生命を得る瞬間には驚き、恐れ、見守っているのみである。彼が生命を吹き込もうと道具を回りに寄せたと述べた後、「私は命を吹き込みました」という発言を

待つ読者は、次の瞬間には、フランケンシュタインが自発的に目をあけ息をする怪物を確認し、その醜さにただろうたえるのを見るのである。フランケンシュタインにとって怪物は、主体的に行動することなく彼の足元に横たわっている間は美しく、希望に満ちたものであり、主体性獲得の瞬間には醜い者へと転じるのだ。

主体と客体、主・従の関係の転覆はフランケンシュタインと怪物によって明確に認識されている。フランケンシュタインは自分が怪物の要求に従属せざる得ない存在であったことを認めている（But through the whole period during which I [Frankenstein] was the slave of my creature I allowed myself to be governed by the impulses of the moment. 135）。怪物の方でもフランケンシュタインに対して「奴隷」と呼びかけ、自分のもつ力を忘れないようにと脅しつける（“Slave, I before reasoned with you, but you have proved yourself unworthy of my condescension. Remember that I have power; you believe yourself miserable, but I can make you so wretched that the light of day will be hateful to you. You are my creator, but I am your master; obey!” 146）。

このような主従関係の転覆は、植民地政策を拡大してゆく際に、英国民が有色人種との関係の中で最も恐れたものである。このような恐れから英国人は有色人種の繁殖力を妄想的に恐れ、抑圧し、また彼らに教育を与えることを拒んだ。奴隷を自分たちと同等の位置へと引き上げる恐れから、有色人種を洗礼することや教育を与えることは、当時の人道主義者と奴隷所有者たちの中で大きな論争となったことをマルチョウは指摘し、その事実とフランケンシュタインの怪物に名前が与えられないことの関連を論じている（29）。当時の有色人種の教育に関わる問題は、怪物の学習過程にも表れている。マルチョウは怪物が白人家族<sup>4</sup>の会話を立ち聞きして言語を習得する過程と、奴隷が主人の家族の会話からは排除されつつも、それを聞きながら言語を習得する過程との類似を指摘している（29）。

奴隷や被植民人種に言語を与えることによって、西欧人は有色人種の知性や人間的な内面を否定できなくなる。また言語の獲得によって、それまで支配の対象でしかなかった者は、主体性を得て自らの人間性と権利について語り出すであろう。これがフランケンシュタインの怪物である。彼の存在は、フランケンシュタインに代表される西欧白人男性中心の判断基準の絶対性を揺るがし、社会に混乱をもたらす一因となる。

怪物のもつ西欧的な内面と黄色い肌は、インド帰りの英国人の特徴と類似している。当時英国では、東インド会社の勢力拡大からインド成金が大流行した。素性も知れず財産も持たずに国を出た者が、インドで数年過ごした後莫大な富を得て帰国し、領地を買い政治家にまでのし上がった。このような状況は、英国の伝統的社会秩序を混乱させ、東洋的な価値観や生活スタイルの流入は、英国人アイデンティティーを脅かすようなものとなった。

怪物は独学によりフランケンシュタインの使用する言語を習得し、西欧の歴史や価値観を身につけたうえで、フランケンシュタインの故郷であるジュネーブに現れる。この点から怪物は、西欧的な内面を持ちつつも、外なる者であることを示す黄色い肌を持つ事となる。これは、植民地での生活の末に黄色い肌をもち帰国したイギリス人、又はイギリス人家庭で仕えた結果、西欧的



生活様式、言語又は内面をもって英国へやって来る有色人種と類似した存在である。このように西欧的な内面を持ちつつも外部性を示し、西欧と東洋の境界を曖昧にする存在は、Linda Colleyが英国の英国性が形成された時代と指摘するロマン主義時代には、英国人自意識を支える基盤となる自他の境界を揺るがす脅威となる。他者を劣ったものとして規定した上に築かれる「支配者」としての西欧的自我が文学研究上持つ重要性に関して、Gayatri Chakravorty Spivakは以下のように述べている。

It should not be possible to read nineteenth-century British literature without remembering that imperialism, understood as England's social mission, was a crucial part of the cultural representation of England to the English. ( 262 )

他者として認識される有色人種を、自らが指導し支配するものとして規定し排除した上に成立する英国的、帝国主義的自己意識にとって、自他両方の領域にまたがるものは、アイデンティティを不安定にする危険な者である。

つまり怪物は、植民地主義政策の拡大が本国にもたらすであろうと英国人が恐れた様々な不安のハイブリッドな表象であると言える。しかしその不安感は、被植民人種の本質に由来しているのではなく、英国人が植民地政策を拡大する上でその行為を正当化するために自ら作り出した他者のイメージと、それを非白人に投影した結果生ずる主体の不安である。これが自ら作り出したイメージを恐れ、また恐れることで創造物を怪物的な行動へと駆り立て、真の怪物としたフランケンシュタインと怪物の関係なのである。

フランケンシュタインの不安は彼が怪物に投影する自らの内面である点を、怪物とフランケンシュタインの3つの遭遇場面から確認したい。それら全てはフランケンシュタインが怪物に見つめられていることに気付く、つまり主体と客体という立場の転倒を彼が意識する場面である。

I started from my sleep with horror; a cold dew covered my forehead, my teeth chattered, and every limb became convulsed; when, by the dim and yellow light of the moon, as it forced its way through the window shutters, I beheld the wretch the miserable monster whom I had created. He held up the curtain of the bed; and his eyes, if eyes they may be called, were fixed on me. His jaws opened, and he muttered some inarticulate sounds, while a grin wrinkled his cheeks. ( *Frankenstein* 61 )

I trembled and my heart failed within me, when, on looking up, I saw by the light of the moon the daemon at the casement. A ghastly grin wrinkled his lips as he gazed on me, where I sat fulfilling the task which he had allotted to me. ( *Frankenstein* 145 )

While I still hung over her in the agony of despair, I happened to look up. The windows of

『フランケンシュタイン』における帝国主義的主体の不安

the room had before been darkened, and I felt a kind of panic on seeing the pale yellow light of the moon illuminate the chamber. The shutters had been thrown back, and with a sensation of horror not to be described, I saw at the open window a figure the most hideous and abhorred. A grin was on the face of the monster; he seemed to jeer, as with his fiendish finger he pointed towards the corpse of my wife. (*Frankenstein* 168)

全ての引用においてフランケンシュタインが怪物を見て恐怖を感じる瞬間に、怪物は笑っている。明らかに最初の場面では、怪物の側に悪意はないにも拘らず、フランケンシュタインが自らの恐怖を怪物に投影し逃げ出すことによって、彼は本当の怪物となり、最後の引用における怪物のニヤニヤ笑いは、悪魔の嘲りの表情となってしまう。

上記の引用中、怪物は登場の際にいつも黄色い月明かりを背にフランケンシュタインを見つめている。月の黄色と怪物の特徴である黄色い肌は、それらが同時に登場することとあいまって、月と怪物の同一性を示唆する。月は自ら光を発するのではなく、太陽の光を受け太陽と月の間にあるものの影を映す。月が陰を映すものであるならば、月の明かりに暗く浮かび上がる怪物の姿は、フランケンシュタイン自身の影であると言える。生命の探求のためには、まず死をマスターしなければならない (To examine the causes of life, we must first have recourse to death.) と考えたフランケンシュタインは、光・生命の世界に背を向け、暗い死の世界へと向き合い、ふと目を挙げたところにある月の中に、自らの影を見たのだ (56)。怪物を照らし出す月光を常に取り囲む四角い窓枠は、フランケンシュタインに自らの影を映して見せる鏡なのである。

Joseph W. Lewも怪物はフランケンシュタインの鏡像であると解釈しているが、彼が鏡に見立てるのはフランケンシュタインと怪物が語り合う場である氷河、つまり 'mer de glace' の「氷＝グラス」を「鏡＝グラス」のパンとして読み解いている。いずれにしても、怪物はフランケンシュタインが見た自らの不安の投影であり、怪物は西欧人が有色人種に関して自ら作り出した恐ろしい幻想、自らの暗い内面の投影なのである。

怪物の自己嫌悪さえも他者に遭遇した西欧の驚きと考えることができる。怪物は白人家族の教育を覗き見ることによって、西欧的価値基準を内面化している。怪物が水鏡で自らの姿を見る時、彼にとって自分の外面は完全に外在化している。怪物は彼を見て恐れをなす西欧人と同じ視点から自分を眺めている。

I had admired the perfect forms of my cottagers their grace, beauty, and delicate complexions; but how was I terrified when I viewed myself in a transparent pool! At first I started back, unable to believe that it was indeed I who was reflected in the mirror; and when I became fully convinced that I was in reality the monster that I am, I was filled with the bitterest sensations of despondence and mortification. (*Frankenstein* 104)

ヨーロッパで誕生し生活してきた怪物は、自分が西欧人のような外見を持っていると期待してい

た。しかし彼は水に映った自分の姿を見て恐れ、そしてその姿を忌み嫌うようになった。これが彼を怪物的行動に駆り立てる一因である。つまり他者に西欧的価値基準を押し付けることによって彼の内面の怪物化がもたらされ、それが彼の怪物的行動を招くのである。

#### IV

従来の批評においては見逃されてきたが、『フランケンシュタイン』には、英国帝国主義とそれを支える思想基盤、西欧・英国的主体形成に関する問題が多く含まれている。帝国拡大に伴い増大する有色人種に関する情報や、それに基づき有色人種を西欧人と同等の人間と訴えるアンチ・スレーバリー運動が引き起こす不安は、自 - 他の関係を主従の関係に置き換え構築された帝国主義的主体が抱え込んだものである。これに加えて、英国内での有色人種の増加や東洋生活経験者の帰国に伴う東洋的価値観の流入に由来する社会不安が、ハイブリッドな表象である「怪物」として小説中に劇化されている。これらの不安は、怪物が自発的に目をあけた瞬間に、また怪物が雄弁に自らに対する社会の不正を指摘し、自らを弁護し、それを贖うようにとフランケンシュタインに強要するとき、西欧人であるフランケンシュタインが感じる帝国主義的主体の崩壊に関する不安である。

#### 注

- 1 本稿は第6回ポストコロニアル文学研究会（平成15年7月、於中京大学）における英語による口頭発表を翻訳し加筆・修正したものである。
- 2 本論においては、現在最も広く読まれている『フランケンシュタイン』1831年版を使用する。
- 3 フランケンシュタインの創造物には名が付けられず、フランケンシュタインによって「悪鬼」、「怪物」などと呼ばれる。彼が生まれながらの怪物ではないにしろ、本論では一般的に使用される「怪物」として彼を指示する。
- 4 怪物が覗き見る家族のうち一人はアラビア人であるが、彼女の母親は白人・キリスト教徒である。彼女はアラビア社会における女性の扱いに嫌悪感を示し、白人である恋人を追ってヨーロッパへやって来て、森に隠遁するフランス人家族に合流した。

#### 引用文献

- Bohls, Elizabeth A. "Standards of Taste, Discourse of "Race," and the Aesthetic Education of a Monster: Critique of Empire in *Frankenstein*." *Eighteenth Century Life* 18 (1994): 23-36.
- Colley, Linda. *Britons: Forging the Nation 1707-1837*. London: Pimlico, 2003.
- Gates, Henry Louis Jr. ed. "Race," *Writing, and Difference*. Chicago: U of Chicago P, 1986.
- Gerbi, Antonello. *The Dispute of the New World: The History of a Polemic, 1750-1900*. Trans. Jeremy Moyle. London: U of Pittsburgh P, 1973.
- Lew, W. Joseph. "The Deceptive Other: Mary Shelley's Critique of Orientalism in *Frankenstein*." *Studies in Romanticism* 30 (1991): 255-283.
- Malchow, H.L. *Gothic Images of Race in Nineteenth-Century Britain*. Stanford: Stanford UP, 1996.

『フランケンシュタイン』における帝国主義的主体の不安

- Nichols, Ashton. "Mumbo Jumbo: Mungo Park and the Rhetoric of Romantic Africa." Richardson and Hofkosh, ed., *Romanticism, Race and Imperial Culture* 93-113.
- Neff, D. S. "Hostage to Empire: The Anglo-Indian Problem in *Frankenstein*, *The Curse of Kehama*, and *The Missionary*." *European Romantic Review* 8.4 ( Fall 1997 ) : 386-408.
- Richardson, Alan, and Sonia Hofkosh, eds. *Romanticism, Race, and Imperial Culture, 1780-1834*. Bloomington and Indianapolis: Indiana UP, 1996.
- Shelley, Mary. *Frankenstein or The Modern Prometheus*. 1831. *Frankenstein*. Ed. Johanna M. Smith. 2nd ed. Case Studies in Contemporary Criticism. Boston: Bedford/St. Martin's, 2000.
- Spivak, Gayatri Chakravorty. "Three Women's Text and a Critique of Imperialism." Henry Louis Gates, Jr. ed. "Race," *Writing, and Difference* 262-280.
- Woodard, Helena. "The Two Marys ( Prince and Shelley ) on the Textual Meeting Ground of Race, Gender, and Genre." *Recovered Writers/ Recovered Texts: Race, Class, and Gender in Black Women's Literature*. Ed. Dolan Hubbard. Knoxville: U of Tennessee P, 1997. 15-30.